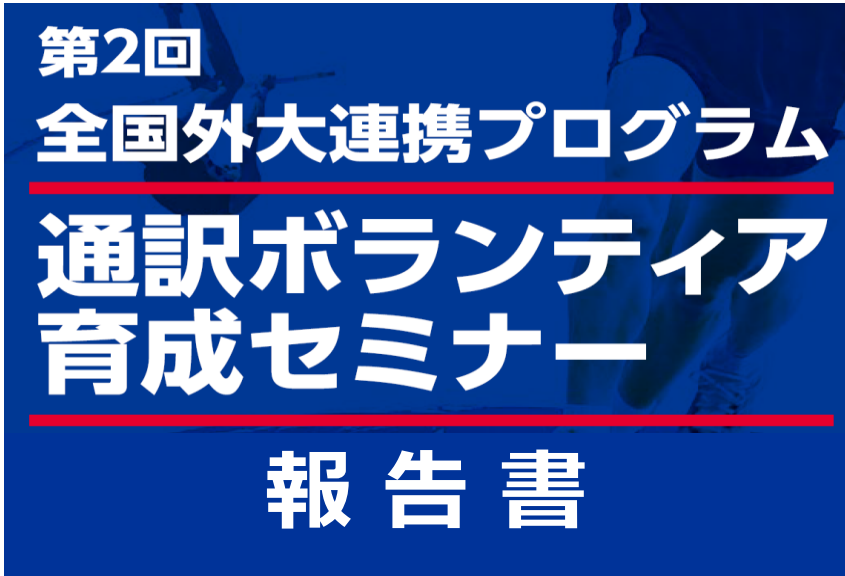


2016年4月21日



**第2回
全国外大連携プログラム
通訳ボランティア
育成セミナー
報告書**

主催

全国外大連合

開催日程

2016年2月9日（火）～12日（金）

開催場所

神田外語大学（千葉県）

後援

文部科学省 外務省 観光庁 千葉県

2017札幌アジア冬季大会組織委員会

公益財団法人 ラグビーワールドカップ2019組織委員会

公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会

NPO法人 日本オリンピック・アカデミー

一般社団法人 全国外国語教育振興協会

協力

公益財団法人 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

一般社団法人 ホスピタリティ機構

目 次

1. セミナー概要	・・・p.3
1-1 大学別の事前申込者数と受講者数	
1-2 学年別受講者数	
1-3 男女別受講者数	
1-4 対応可能言語	
2. 学生の参加動機	・・・p.6
2-1 参加目的	
2-2 参加へのきっかけ	
3. 参加後の自己評価	・・・p.7
アンケートによる集計	
セミナーの様子	
4. 各講義内容について	・・・p.9
講義名	
講師名	
経歴	
講座内容	
受講者からの感想	
講義の写真	
5. セミナーの様子（写真）	・・・p.25

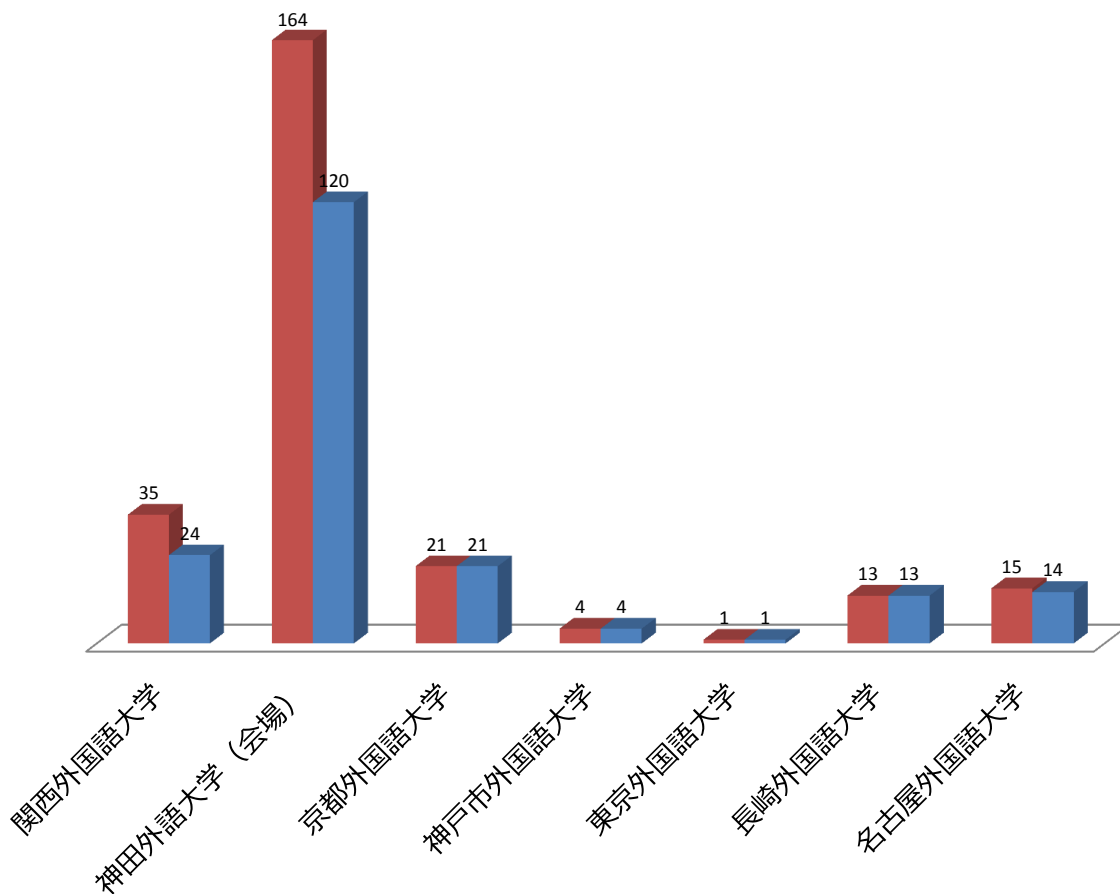
1. セミナー概要

1-1 大学別の仮申込者数と受講者数

単位：人

大学名	仮申込者数	募集枠	受講予定者数 (開催前日時点)	当日受講者数	バンク登録者数
関西外国語大学	35	20	24	24	24
神田外語大学 (会場)	164	120	121	120	111
京都外国語大学	21	20	21	21	21
神戸市外国語大学	4	20	4	4	4
東京外国語大学	1	20	1	1	1
長崎外国語大学	13	20	13	13	13
名古屋外国語大学	15	20	14	14	14
合計	253	240	198	197	188

仮申込者数と当日受講者数

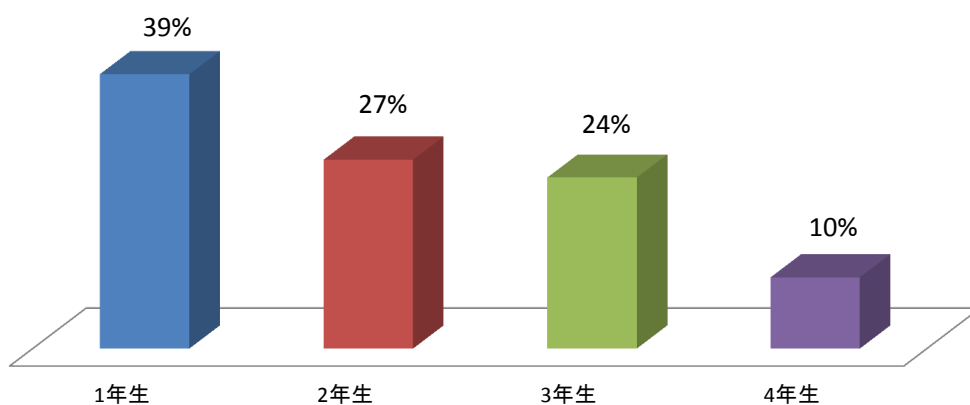


1-2 学年別受講者数

単位：人

大学名	BASICコース		INTERMEDIATEコース		大学別計
	1年生	2年生	3年生	4年生	
関西外国語大学	12	7	5	0	24
神田外国語大学	49	31	30	11	121
京都外国語大学	6	9	4	2	21
神戸市外国語大学	1	1	0	2	4
東京外国語大学	1	0	0	0	1
長崎外国語大学	5	0	3	5	13
名古屋外国語大学	3	5	6	0	14
学年別計	77	53	48	20	198

学年別受講者数

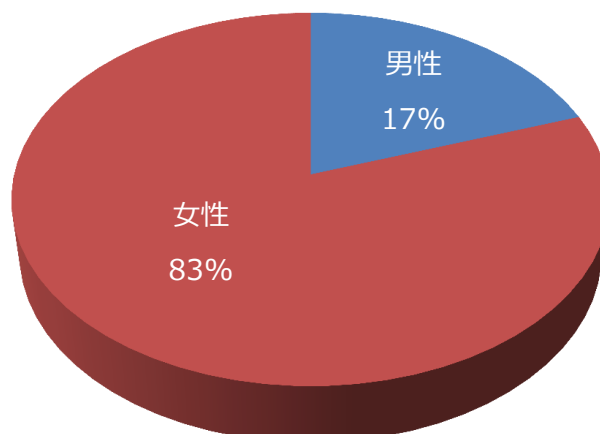


1-3 男女別受講者数

単位：人

大学名	男性	女性	大学別計
関西外国語大学	9	15	24
神田外国語大学	24	97	121
京都外国語大学	2	19	21
神戸市外国語大学	2	2	4
東京外国語大学	1	0	1
長崎外国語大学	1	12	13
名古屋外国語大学	0	14	14
男女別計	39	159	198

男女別受講比率



1-4 対応可能言語

単位：人

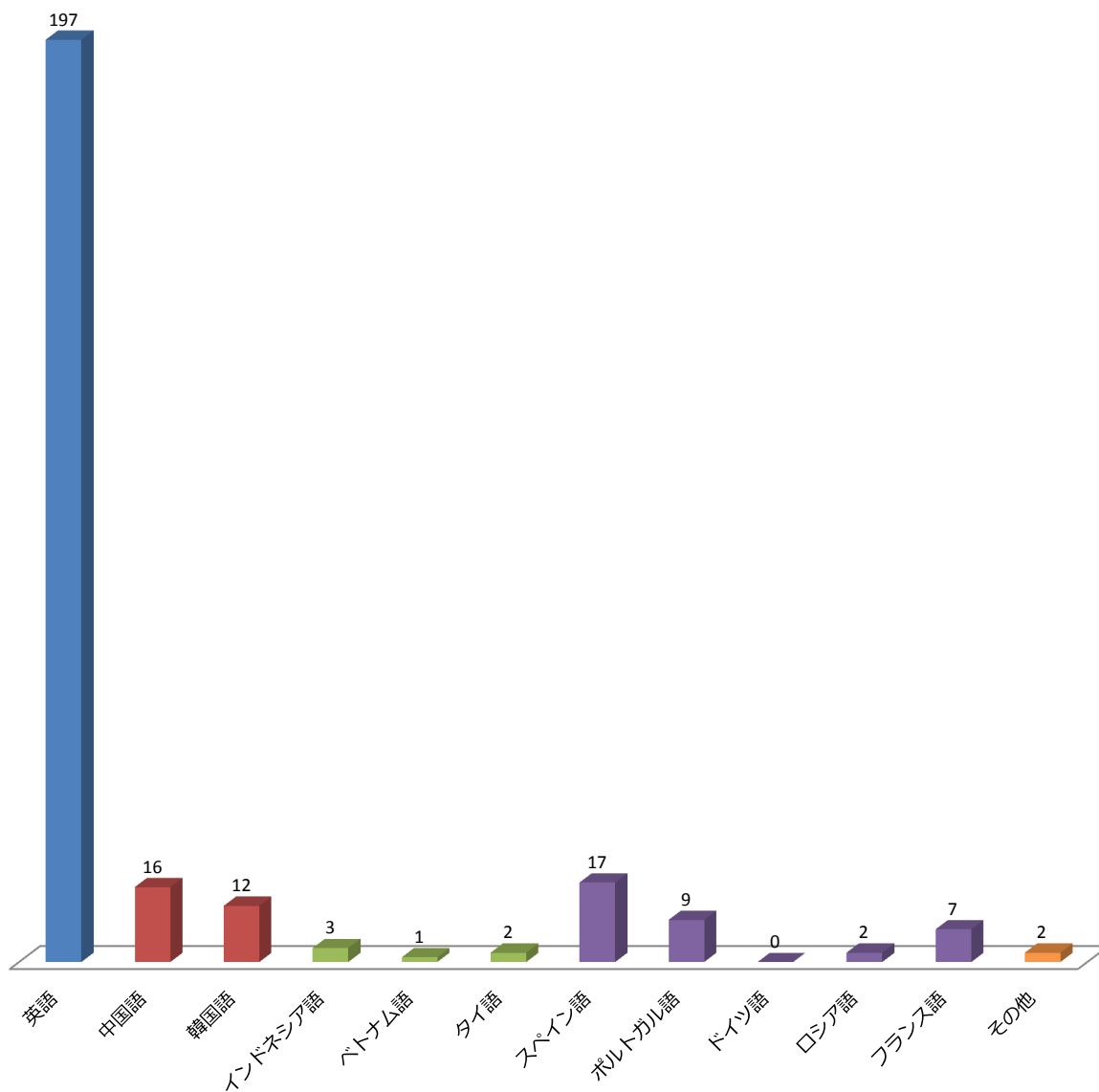
英語	中国語	韓国語	インドネシア語	ベトナム語	タイ語
197	16	12	3	1	2
スペイン語	ポルトガル語	ドイツ語	ロシア語	フランス語	その他
17	9	0	2	7	2

※当日受講者の対応可能言語内訳を示す。

※英語は参加者全員が対応可能な言語。

※『その他』の内訳：イタリア語2名。

対応可能言語



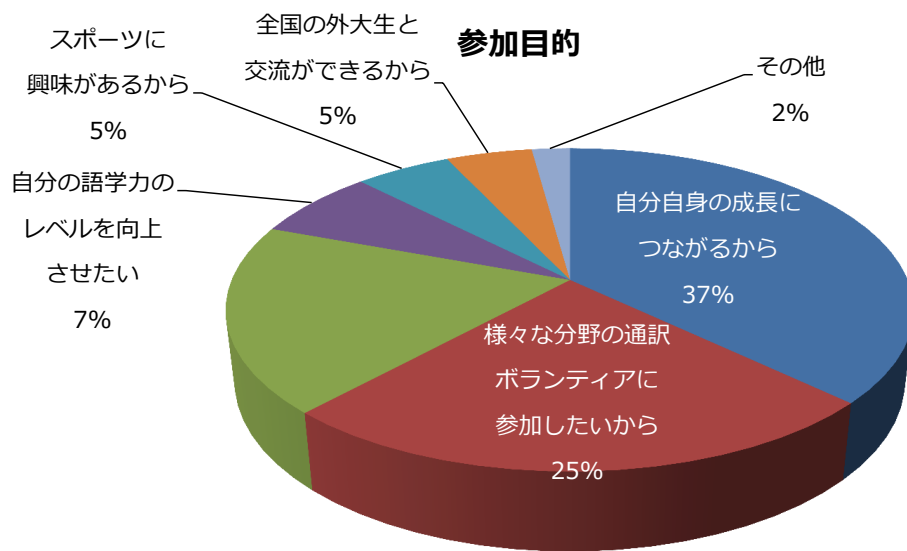
2. 学生の参加動機

2-1 参加目的

単位：人

参加目的	回答数
自分自身の成長につながるから	69
様々な分野の通訳ボランティアに参加したいから	46
グローバルに活躍したいから	35
自分の語学力のレベルを向上させたい	13
スポーツに興味があるから	10
全国の外大生と交流ができるから	9
その他	4

回答者数：186人

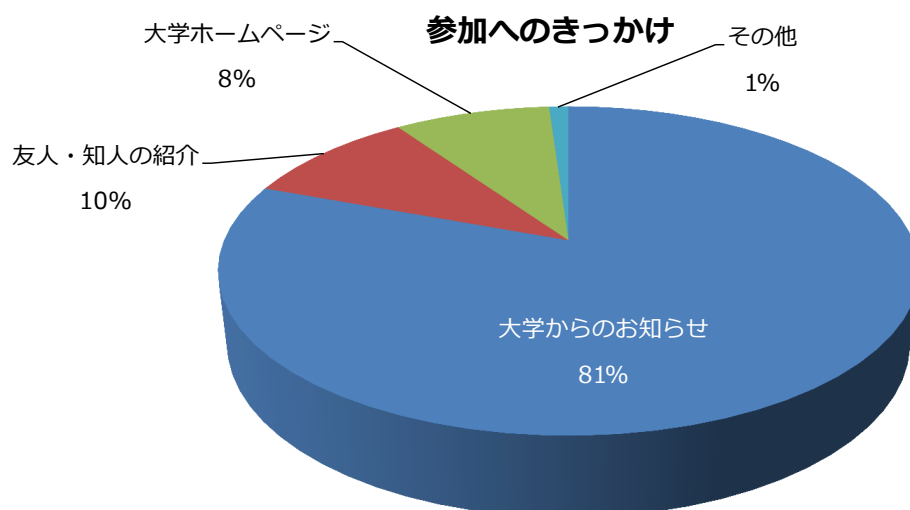


2-2 参加へのきっかけ

単位：人

参加へのきっかけ	回答数
大学からのお知らせ	150
友人・知人の紹介	18
大学ホームページ	16
新聞記事	0
その他	2

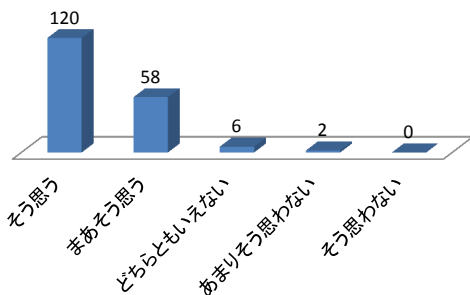
回答者数：186人



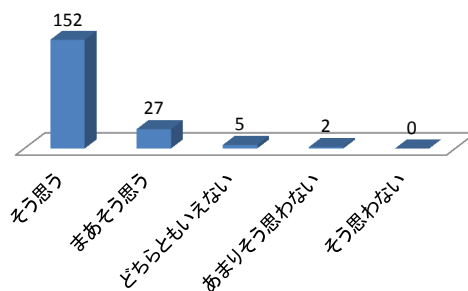
3. 参加後の自己評価 — アンケートによる集計 (単位：人)

回答者数：186人

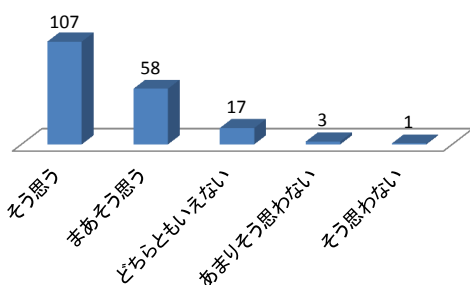
1. セミナーを受講してグローバル人材とは何か、そのために何をすべきかが明確になった



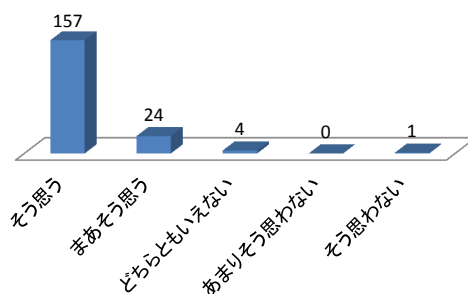
2. 語学力とコミュニケーション力の必要性について学ぶことができた



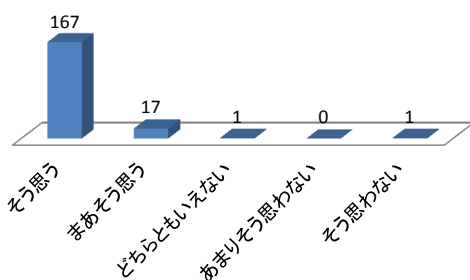
3. スポーツを取り巻く多様な分野や専門知識の理解が深まった



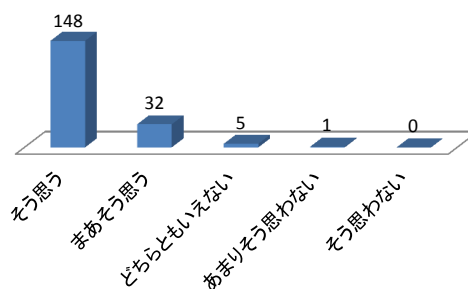
4. 参加する前より語学を学ぶ意義と学習意欲が高まった



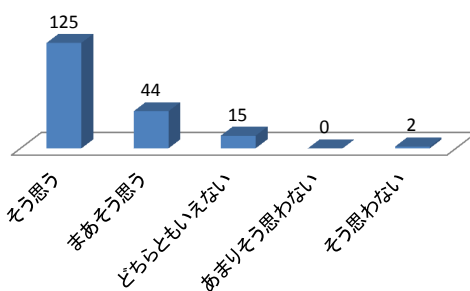
5. 今後、通訳ボランティア実践や様々な活動に今より積極的にチャレンジしてみたい



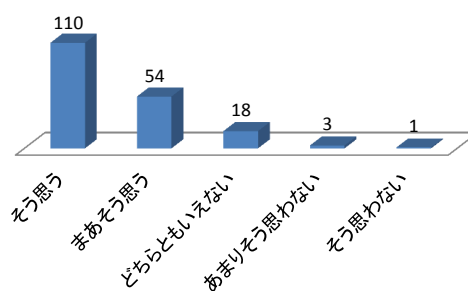
6. 受講前よりスポーツを通じて異文化・国際交流に興味が高まった



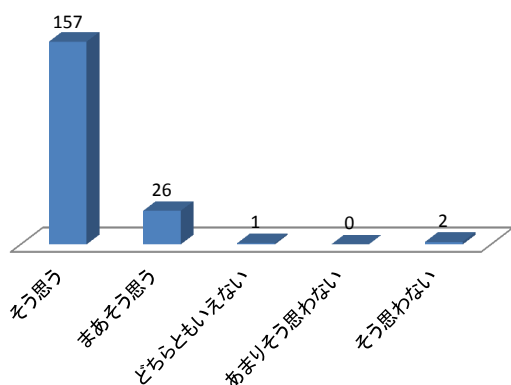
7. 日本人としてのアイデンティティについて考えるようになった



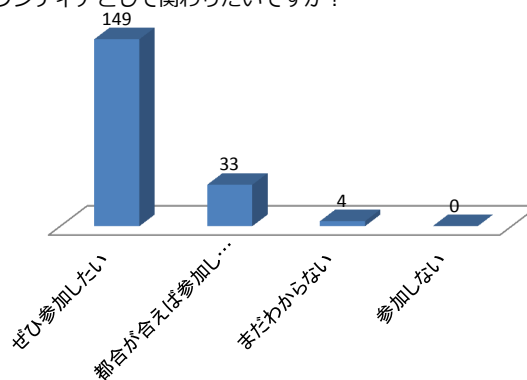
8. 自分の興味・関心がある分野に気づき、新たな自分を発見した



9. このセミナーを受講して満足している



10. 将来今後開催予定の世界的競技大会に通訳ボランティアとして関わりたいですか？



11. 『このセミナーを通してのご感想やご要望、ご質問、運営についてお気づきの点等ご記入ください。』への回答内容

回答内容	回答件数
自分のためになった、よい経験になった	26
充実した、濃い4日間だった	11
他外大の学生とつながった、交流できた	11
講義形式が多い、グループワークやコミュニケーションがほしい	10
運営がよかった	10
モチベーションアップにつながった	8
楽しかった	8
講義の質が高い、有意義だった	8
おもてなし、今後開催予定の世界的競技大会に役立つ講義だった	7
日本の知識が必要だと感じた、興味を持った	7
また第2弾、ハイレベルなセミナーを開催してほしい、参加したい	7
通訳ボランティアが明確になった	5
語学意欲が増した	4
スポーツに関心がわいた	4
英語以外の言語も対応してほしい	4
アドベンチャーが楽しかった、ためになった	3
グローバルに考えられるようになった、視野が広がった	3
特別感がなかった（スマホで検索できる、大学の講義と同じ等）	3
大学では学べない貴重な内容だった	2
講義を改善すべき（自己紹介がやや多い、目的が不明確等）	2
運営が悪かった（教室出入りが目障り、メール量が多い等）	2
懇親会の飲み物が足りなかった	1
参加者を海外から招致してもよいと思った	1
布村副事務総長のお話をもっと聞きたかった	1

※上記「回答内容」に当てはまる回答を「回答件数」としてカウント。

回答件数合計：148件

4. 各講義内容について

【2/9(火)】基調講演

講演者名	東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 副事務総長 布村 幸彦様
------	---

参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆布村副事務総長のお話を聞いてもっと東京オリンピック・パラリンピックに訪れる人々のお手伝いやオリンピックという全世界の人々が熱くなれる大会に参加したいという意欲が湧きました。このように大会に直接関わっている人のお話を聞いたことはとても貴重な体験だったと思います。「スポーツには世界と未来を変える力がある。」という言葉が大変心に残りました。(関西外国語大学・2年・女性)

◆この講義は、セミナーで一番初めの講義だったが、早くも自分の中で目標ができた。なぜなら、布村先生が、東京オリンピック・パラリンピックの専門ボランティアなどの応募を、2018年の夏頃から始めようかと考えているというお話をしてくださったからだ。また、東日本大震災から日本がどのように復興したのか、そしてそれを支えてくださった人々や国々への感謝を伝えるものとおっしゃっていたのが印象的だった。私自身、東日本大震災の時に福島県福島市に住んでいたということもあって、通訳ボランティアだけではなく、今までの東北の頑張りなどについても、世界の人に伝えて、東京オリンピック・パラリンピックに貢献できたらいいなと考えた。(神田外国語大学・1年・女性)

◆2020年の東京オリンピック・パラリンピックといえば、最近よくニュースで耳にするエンブレム問題や、新国立競技場問題などで、正直あまりイメージがよくなかった。東日本大震災から5年弱、未だにその影響で苦しんでいる人は多くいる。そんな中でオリンピックやパラリンピックは希望の象徴であるべきだと自分は考えていた。しかしこの基調講演にて副事務総長の生の声を聴いて、全国の大学と連携してオリンピック・パラリンピック教育を推進しているなど、メディアでは報道されない五輪の実態を知ることができ、とても有意義な時間だった。また、復興五輪として、海外からの支援に感謝し、日本の魅力を再発信するともいい機会だと感じた。スポーツをする、見るだけでなく、支えるという3つ目の楽しみを通じて、世界の人々と深いつながりを築くともいい機会だと感じた。(京都外国語大学・2年・男性)

◆一語一句が貴重な講演でしたが、中でも特に印象に残ったのは布村さんが何度も強調されたレガシーという言葉です。東京オリンピック・パラリンピックの成功は大前提として、その後の社会に何を残すかが課題であるという前向きな姿勢にはとても感銘を受けました。時期的な問題もあり、私自身が直接大会に関われる可能性は少ないとは思いますが、それでも東京オリンピック・パラリンピックに向けた取り組みの一環であるボランティアセミナーに参加した学生の一人としてレガシーの構築に貢献出来たらと思うところです。(神戸市外国語大学・2年・男性)

◆2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて組織委員会がどのような目標をかかげ、どのような活動を推進しているかいくつかの例をあげ話された。例えば、大学や地元の小中高校等学校におけるオリンピック教育、パラリンピック教育の支援、グローバル人材育成、広報活動、イベントの開催などがあげられた。国際社会にむけてどのように発信し、また地域社会にどのように繋がりを持ち、レガシーとして次の世代につながるよう取り組まれているか学んだ。世界的な競技大会の開催に向けて、国は着実に国民を啓蒙し、人材育成に取り組んでいることを知り、誇らしくなった。(長崎外国語大学・4年・女性)

◆東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の副事務総長様から直々にお話を頂けて光栄でした。今まで大会についてここまで詳しく知ることがなかったため、この講演は大変機会でした。より大会ボランティアへの興味がわきました。このセミナーへの期待が一層高まり、有意義なものにしようと改めて感じました。(名古屋外国語大学・3年・女性)

【2/9(火)】スポーツ文化・教養①

講師名	真田 久先生
経歴	2008年筑波大学体育学系教授 2010年筑波大学オリンピック教育プラットフォーム事務局長2012年同大学体育専門学群長 2014年つくば国際スポーツアカデミー (TIAS) アカデミー長 つくば国際スポーツアカデミー (TIAS) アカデミー長 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会参与
講座内容	今日の世界的競技大会は古代のものをモデルにした競技会であり、その採点や大会の理念を広めるムーブメントの一つでもあります。そのことを前提に次のことを学習します。 ・古代の世界的競技大会はいつ始まり、どのような競技が行われたのか ・クーベルタンは、どのような思いで復活したのか。 ・今日に至るまで、世界的競技大会にはどのような危機が起こり、それを克服してきたのだろうか。



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆オリンピックの歴史に加え、最初の大会種目が吹奏競技であったことやなぜ4年に1度開催されるのかなど興味深い一面を学びました。先生がおっしゃっていた大会で重要なことは、勝つことではなく参加することとよく戦うことだということに非常に共感しました。メダルの個数に注目しがちですが、“記録”に残ることも大切ですが、正々堂々と勝負し“記憶”に残ることがより良いと感じました。(関西外国語大学・3年・男性)
- ◆この講義を受ける前は、正直、スポーツに興味はなく、オリンピックがなぜ開催されているかなど考えもしなかった。しかし、真田先生の問題形式の講義はとても面白く、内容はとても納得するものだった。フェアプレイの精神のもと身体、心、知性を鍛える。文化は習慣の違いを越えて人々が友好を深める。これはオリンピックという舞台でスポーツを通してだからできることだと思った。古代オリンピックは戦争の中止の証として始まった。それからわかるように人々にとって平等に争うことができ、勝手も負けても笑顔で終われるものだったのではないかと思った。大会を通して私たちが感動できるのは、皆が平等で、お互いを認めあってから勝負しているからだと感じた。(神田外語大学・2年・女性)
- ◆私はこれまで、オリンピックの歴史などには一切興味を向けたことがなかったため、この講義では初めて聞く話が多く、とても興味深かった。例えば、私は大会が四年ごとに行われることに対して疑問も持ったことがなかった。しかし、実際には太陽暦に起因することであり、明確な理由があったのだと理解した。そういった何気なく知っていること一つ一つに意味があるのだと気づけたことはとても勉強になることだったと思う。講義中にはクイズなどもあり、とても楽しく参加することができるものだったため、セミナーを終えてからも記憶に残る授業の一つとなった。オリンピックを通じた異文化交流に、私も参加したいと思えるような講義であったと思う。(京都外国語大学・2年・女性)
- ◆オリンピックの背景にある文化と歴史を学びました。大会は戦争中止の証として始まり、現在も大会開催期間中は休戦協定を結ぶと聞いて驚きました。オリンピックはそれほど世界がひとつになるイベントなのだ偉大さ、重要性を感じました。(神戸市外国語大学・3年・女性)
- ◆オリンピックに関する知識がほとんどなかった私は、スポーツ文化・教養の講座を通して、古代・現代オリンピックの始まりや精神などいろいろなことを学びました。最も印象的だったのは、復興された古代競技際の映像です。古代の服装を着て、古代オリンピックの規則に従って短距離競走を行うことに興味深く感じました。機会があれば、そのイベントに参加したいと思います。(長崎外国語大学・4年・女性)
- ◆クイズ形式で楽しくオリンピック文化を学ぶことができました。1940.1960.2020年の3回の東京招致成功には、復興とおもてなしというテーマがずっと繋がっていることを初めて知りました。2020年の東京オリンピック・パラリンピックが復興への活力を与え、改善できれば、世界に対する大きなメッセージになります。その成功のためにも、より良い環境の中で選手がプレーできるよう、通訳ボランティアとして2020年東京オリンピック・パラリンピックを支えたいと思いました。(名古屋外国語大学・1年・女性)

【2/9(火)】スポーツ文化・教養②

講師名	中森 邦男先生	徳増 浩司先生
経歴	公益財団法人日本障がい者スポーツ協会強化部長 日本パラリンピック委員会事務局長、 公益財団法人東京2020オリパラ組織委員会 理事 日本女子体育大学 非常勤講師	日本ラグビーフットボール協会国際委員長 ラグビーワールドカップ組織委員会事務局長 公益財団法人日本ラグビーフットボール協会理事 国際組織ワールドラグビー理事
講座内容	車いすスポーツから始まった世界的競技大会の発祥から現在について解説します。 ・世界的競技大会の主催国を中心とした選手強化と向上 ・2014年4月障がい者スポーツの文科省移管による振興の加速化 ・金メダル22個を目標に掲げた選手強化	世界3大スポーツ大会のひとつであるラグビーワールドカップ2019はアジアでは初の開催。下記を中心に講座を行います。 ・ラグビーワールドカップの開催意義 ・日本開催によって、どんなことが私たちにもたらされるのか ・開催に向け今からどんな準備をしたらいいのか



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆中森先生：日本のパラスポーツの施設や対策に課題があることなど教えてくださいました。障害者は障害者だけにしか出来ないことスポーツもあるので公立校でもそういったスポーツを増やして健常者も共に楽しんでいけたらいいのと思います。徳増先生：ラグビーを殆ど知らない私でも熱くなるものがありました。今後開催予定の世界的競技大会で何かしらの支えになりたいと思っていましたが、2019年に日本で行われるラグビーワールドカップは全国で開催されると聞いて東京だけでなくいろんな地域の魅力を知ってもらえる機会がよりあると思うので、ぜひ大会ボランティアに参加したいと思いました。（関西外国語大学・1年・女性）

◆スポーツの魅力は日常の身体運動によるいきいきとした活動、スポーツでの成功体験や自己実現、人間関係のつながりをつくることにある。スポーツを続けていくことは心身共に良い。若いうちはスポーツを通じて、強い心を育てることもできる。またスポーツは例え話や言語が違って不可能ではない。全世界共通なのである。（神田外語大学・2年・女性）

◆障がい者の世界的競技大会には以前から少し関心があった。幼少のころにテレビで観た車椅子バスケットボールがとても格好良く感じたのをよく覚えている。メディア露出が少ないと感じる障がい者の世界的競技大会だが、その進化はすさまじいものだとこの講義を受け知った。競技用車椅子や、義手義足の技術力、選手を支える人々のスキルがとても高いものでとても驚いた。身体は不自由でもスポーツをしたいという欲求は健常者と同じで、実際にプレイできる環境が整えられていくことはとても素晴らしいものであると思う。身体のバリアフリーだけでなく心のバリアフリーも考えていけると更に良いスポーツ祭典や競技大会になると思った。（京都外国語大学・2年・男性）

◆私自身、障がい者の世界的競技大会の記憶はあまりなく、競技や選手のこと知りませんでした。しかし、世界的競技大会記録に迫る障がい者の記録があることに衝撃を受けました。医療技術や器具の進歩などによって、障害のある方もスポーツに挑戦できる環境が整ってきています。まずは障害者スポーツについて知ることが一番大切なのではないかと思いました。（神戸市外国語大学・4年・女性）

◆中森先生：一般の学校に通う障害者の子供は、一般の生徒達と一緒に部活や体育の授業をするのは設備的にもまた子供の心境的にも難しく、スポーツの楽しさを実感する機会を持つことができない。各都道府県が障害者へのスポーツ体験イベントを開催したり、設備の整った障害者のための学校に積極的に足を運ぶことが問題解決の鍵であろう。徳増先生：今までラグビーを見たこともなく、ルールや選手などの知識は全くなかったが、先生の話聞いてラグビーに関心を持った。中でも、日本が強豪チームである南アフリカに勝ったシーンを映像で見たときは鳥肌が立ち、授業後も自分の携帯で何度も見直した。2019年に行われるラグビーに注目したい。（長崎外国語大学・3年・女性）

◆この講義で一番印象に残った言葉は「失われたものを数えるより、残された機能を最大限に生かそう」ということです。現在では障がい者の世界的競技大会に入る人も技術の進化とともに、健常者に勝るくらいの力を持つようになってきました。スポーツには人も自分も元気になる力があるということ学びました。またラグビーも日本が強いということで、女子ラグビーももっと日本でも競え合えるくらいチームが増えるといいかなと思いました。（名古屋外国語大学・2年・女性）

【2/9(火)】おもてなし講座

講師名	江上 いずみ先生
経歴	筑波大学附属高校を経て慶應義塾大学法学部法律学科卒業。日本航空客室乗務員として30年に渡り国際線・国内線を乗務。18,525時間を乗務して2013年7月に退社。同年11月 Global Manner Springs 設立。2014年より筑波大学にて「グローバルマナー概論」講義。2015年4月同大学客員教授就任。
講座内容	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の文化「おもてなしの心」とは何か、海外ではどのように紹介されているかを知る。 ・JAL・ANAの現役・OG客室乗務員に実技指導を仰ぎながら、「おもてなし」の具体的表現方法を学ぶ。 ・30名1グループとして外国人への接遇と国際人としてのグローバルマナーを身につける。 ・今後開催予定の世界的競技大会に向けて、開催国日本のホスト役として如何に行動すべきかを実技を交えて体得する。



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆日本を象徴する「おもてなし」文化の定義を再確認する講座でした。JALでのCA時代の実体験を踏まえ、相手から好印象を持ってもらうために気を付けることなど日常生活で役に立ち、今すぐに実践できる技法を教わりました。おもてなしとは単に表情や言葉遣いと解釈していましたが、それだけではなく身だしなみなど細かな部分までに及ぶということが分かりました。相手は日本人だけでなく異文化背景を持った方、更には障がい者の方にも及ぶのでそれに応じた適応能力も養わなければならないと思いました。(関西外国語大学・3年・女性)

◆そもそもおもてなしとは何か具体的に答えを出すこともできないような状態でこの講義に臨み、講義終了後にはおもてなしとは何か自分の中で見つけられた気がします。おもてなしとは、見返りを求めず、相手のために思い心を尽くして行動すること。このおもてなしの精神はボランティアをする上で必要不可欠であると感じました。日常的にもおもてなしの心は表すことができます。例えば飲食店のアルバイト先で笑顔でお客様の要望に丁寧に答えるなどです。江上先生は100-1≠99じゃなく100-1=0だとおっしゃっていました。1人の悪い言動でその企業や団体の全体のイメージダウンにつながるということです。ボランティアとして責任ある行動をとり、かつ今回学んだ日本ならではのおもてなしの心を存分に発揮したいと思います。(神田外国語大学・1年・女性)

◆江上先生のお話の中で、おもてなしについて沢山のことを学んだ。基本的なことだが、おもてなしとサービスの違いや第一印象を高めるために必要なこと、美容基準などだ。これらのことは、通訳ボランティアとしてだけでなく、私生活においてもたいへん役に立つことだったので、この講義を熱心に聞いて良かったと思う。なかでも、印象に残っているのは"By Nameの効果"についてだ。ただ "おはよう"というよりも、"おはよう、〇〇さん"という方が、親しみを感じるというものだ。そして、名前を呼ばれることで快感を感じるという。これは、とても簡単なことなのですぐにでも意識してしてみようと思う。また、この講義で、相手によって異なるおもてなし(何をしたらよいか、何を必要としているか)が大切だということがよく分かった。(京都外国語大学・1年・女性)

◆サービスとおもてなしの差から、グローバルマナーまで、通訳ボランティアとして知っておくべき基本的なマナーについて教えていただきました。日本の挨拶が体に染みついてると、堂々とした姿勢で目を合わせて挨拶したり、ハグをしたりするのは慣れが必要だと感じたので、これから意識して練習していきたいです。最後の機内アナウンスのプレゼントは最高でした。(神戸市外国語大学・4年・女性)

◆私が一番印象に残った授業である。普段のわたしは、何もできていないと実感したと共に、もっと、おもてなしについて勉強していきたいと思った授業だった。サービスとおもてなしが違うということや第一印象で人が決まることなど、今、自分で気を付けるだけでできることがたくさんあると思った。だから、毎日気をつけてこうどうしていき、おもてなしを少しでも多く身に付けるべきだと思った。もし、今後開催予定の世界的競技大会のボランティアに参加したら日本人の代表として胸をはってできるようにしたいと思った。(長崎外国語大学・1年・女性)

◆通訳ボランティアとしてだけでなく、これから社会人になる者として参考になることがたくさん学べました。相手に良い印象を持ってもらうために、常に口角を上げて笑顔をキープしたいと思います。そして、各国のマナーについてももう少し勉強したいです。(名古屋外国語大学・3年・女性)

【2/10(水)】日本文化の理解

講師名	Andrew Kamei Dyche (アンドリュー・カメイ・ダイチ) 先生
経歴	ブリテッシュ・コロンビア大学歴史研究科修士課程修了、南カリフォルニア大学歴史研究科博士課程。国際交流基金日本研究フェロー、上智大学、芝浦工業大学非常勤講師を経て神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所特任講師、日本研究所研究員。専門は日本近現代史。
講座内容	知っているようで意外と知らない日本の文化や歴史。大昔から伝わる日本の伝統だと思っていたことが意外と新しいものだったり、日本独自の文化と思っていたことの原点が外国だったり、またその逆もしかり。英語で日本文化や歴史を学ぶと、言葉の違いだけではなく、「日本」という国や「日本語」という枠から外れた考え方や思いがけない一面が生まれてきます。アタリマエ、から一歩踏み込んだ新しい日本について見ていきます。



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆亀井先生の講義は、外国人目線で日本の文化を理解するというものでした。It is significant to know what foreigners really want to do. という気持ちを忘れず外国人観光客や留学生に接したいなと思いました。確かに、日本で爆発的に流行っているものだから外国でも知っている人が多いだろうと思って紹介したもので、全く知らなかったり十分に楽しんでもらえなかったことが今まででの経験でも何度かありました。逆に外国人にこれは知っている？と聞かれて分からなくて答えられないということも何度かありました。また、日本独自の文化だと思っていたものが実は外国から伝わったものであったり、まだまだ日本文化を理解しきっていないなと思いました。何か一つでも"これぞ日本！"と誇れるような歌であったり遊びであったりを覚えておこうと思いました。(関西外国語大学・1年・女性)

◆この講義では、日本文化についてお話し頂いた。日本語は、ほかの言語に比べて柔軟性が高く簡単に新しい言葉を作ることができてしまう。日本語の単語のルーツをたどることで、当時の日本とその他の国との関係が見えてくる。フランス語をもとにした言葉、ポルトガル語からの言葉など様々なものがあつた。日本語も説明しようとするのが難しく、それらを理解し自らの言葉で説明できてこそ自国理解、そして言語理解といえるのではないだろうか。(神田外語大学・3年・男性)

◆Andrew先生の講義のなかで、一番印象に残っていることは、Katakana does not always mean "English"ということである。多くの日本人は、カタカナ=英語、という風に思っているが、カタカナ=外来語、であつて外来語とは必ずしも英語ではないということだ。当たり前のことだが、実際に大学の中でも留学生に向かっていきなり英語で話しかけたりしているような生徒をよく見る。もしかしたら、その留学生は英語圏出身でないために、英語があまり得意ではないかもしれない、日本語の方が英語よりも得意かもしれないのに、外国人だから英語が話せる、と勝手に判断してそのよう行動する人は沢山いる。これは、通訳ボランティアをするにあたって、大事なことだと感じた。(京都外国語大学・1年・女性)

◆海外のかたが日本文化のどのような部分に興味を持っているのか、日本文化が海外にどのような影響を及ぼしているのかという講義を通して、実は自分は日本文化というものをもっと理解出来ていないのだと実感できました。自分は今年、留学も控えていますのでそれまでに何とか今回の講義を足掛かりに日本文化に対する理解を深め、日本の魅力を世界に発信できるようになりたいです。(神戸市外国語大学・2年・男性)

◆先生は「日本中の世界」、「世界中の日本」と「日本の文化を紹介していた人たち」三つのパートから異なる視点で日本の文化を再討論しました。片仮名は英語だけではなく、平仮名でも伝来のものもあり、日本では流行っていないものは逆にほかの国には流行っているという新たな認識を頭の中に入れてきました。(長崎外国語大学・3年・女性)

◆文化が違う国が日本へきて、日本の一部になり、それをまた違う国へと伝え、どんどん変化していくこと。これが文化のあり方である。言葉は状況によって変わり、意味も書き方も変わることがあるため、訳す時には気をつける必要がある。地元の文化を知る。人々は何が好きなのかを知る必要がある。外国の先生からの観点で話を聞くことができ、実際どのように感じているのか知ることは大事だし、楽しかったのでよかったです。(名古屋外国語大学・3年・女性)

【2/10(水)】異文化の理解

講師名	Yoko Zetterlund (ヨーコ・ゼッターランド) 先生
経歴	1992 バルセロナ五輪 銅メダリスト (女子バレーボール アメリカ代表) 2020東京オリンピック・パラリンピック組織委員会 理事 日本体育協会 理事 嘉悦大学 准教授、女子バレーボール部 監督 有限会社 オフィスブロンズ 取締役社長
講座内容	今後開催予定の世界的競技大会により海外からの注目度が高まっています。観光客の増加が見込まれ、経済効果が期待されると同時に、日本の更なる「グローバル化」が求められるようになってきました。スポーツ、そして世界的競技大会を通じて「人のグローバル化」とは何かを本講義では考えていきます。



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆アメリカと日本のコミュニケーションの違いを学びました。共感できなくても認識し、お互いを理解することが大切だと教わりました。普段、相手を尊重しているつもりでも相手の意見に対して、思わず、否定的なことを言うてしまうことがあるので気を付けないといけないと思いました。(関西外国語大学・3年・女性)
- ◆Yoko Zetterlund先生の経験からアメリカと日本の文化の違い、コミュニケーションとは何か、2020年東京五輪にむけて等について講義をしてくださいました。
先生の講義の中でのコミュニケーションとは、“共感できなくても認識する、そこにあるということを認識する”という言葉に感銘を受けました。私自身も人のコミュニケーションに悩む毎日ですが、たとえ共感できなくとも、相手の存在を認識し認めることがコミュニケーションを図る上での大事な一歩であると感じました。先生がRespect each otherという言葉が使われていて、本当に基本的なことのように感じますが、そういうものほど普段忘れがちで、自分ができていないことなのかなと思いました。(神田外国語大学・4年・女性)
- ◆この講義で最も印象に残っているのは「自分が本当に好きなことは譲らない」という言葉です。ヨーコ・ゼッターランド先生もバレーが好きという譲れない思いがあったからこそ、最後まで頑張りぬくことができたとおっしゃっていました。私も、英語が好き、様々な国の人々とかかわることが好きという自分の中にある譲れないものを軸に、これからの将来について考えていこうと思いました。(京都外国語大学・3年・女性)
- ◆先生の実体験を基にした講義で、興味深かったです。私の周りにも、幼少期を海外で過ごした、或いは親が外国人などのバックグラウンドを持った友人がいます。そういった人たちのことを、お話を通して理解する良い機会となりました。(神戸市外国語大学・4年・女性)
- ◆ゼッターランド先生の生い立ちは決して楽な人生ではなかったけど、バレーというスポーツに出会い、明るい人生を送られているので、スポーツの持つ力は偉大だなと思いました。スポーツは国境を越えられるという言葉聞いて、まさにその通りだと思いました。(長崎外国語大学・4年・女性)
- ◆コミュニケーションとは「共感する」ということではなく、「お互いをリスペクトしあう」ことが大事という言葉が心に残りました。共感という観点でコミュニケーションを捉えていると、共感してもらえないときに批判が起こり、対人関係に亀裂が生じてしまいます。自分のことだけを、リスペクトしてもらおうのではなく、リスペクトをギブアンドテイクする関係こそが最もコミュニケーションをとる上で大切ということを学びました。(名古屋外国語大学・1年・女性)

【2/10(水)】アドベンチャー実技

講師名	市瀬 良行先生	江川 潤先生
経歴	<p>神田外語大学体育・スポーツセンター准教授・マネージャー</p> <p>千葉県ラグビーフットボール協会理事（大学委員長、女子強化、他）</p> <p>日本体育学会、日本ラグビー学会、日本野外教育学会会員</p>	<p>神田外語大学 体育・スポーツセンター 特任講師</p> <p>順天堂大学在学中に野外教育と出会い、専門的に学ぶため筑波大学大学院に進学。</p> <p>現在は言語習得、コミュニケーションスキルの向上の為の野外教育の効果を検証中。</p> <p>健康運動指導士、SAJスキー準指導員、体育学修士</p>
講座内容	<p>神田外語大学で行われている「アドベンチャーコミュニケーションプログラム」とは、イギリスのサバイバル学校で行われていた冒険活動プログラムを基に、学校教育へ適用するよう、より身近で安全に体験できるようにアメリカで開発されたものがアドベンチャープログラムです。このプログラムをベースにコミュニケーションに焦点を当て、神田外語大学「アドベンチャーコミュニケーションプログラム」がプログラムされました。今回、通訳ボランティア育成セミナーに参加する学生に新しい学びを提供します。</p>	



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆グループメンバーで話し合っって問題を解決したり、1つの課題について取り組むという事の面白さを知る事ができた。会話をするという事の大切さと、自分から安全圏から一歩抜け出したところに行くという事をこれから意識してやっていきたいと思う。（関西外国語大学・2年・男性）
- ◆この講義を通して、初対面の相手との距離の縮め方を学んだ。笑顔の大切さ、自分を相手に知ってもらうことの大切さ、どうすれば諦めずに進み続けられるのか、自分の理想の自分像はどんな人間なのか再確認することができた。社会に出たらこうやって仲良くなるタイミングはそうないのかもかもしれない。自分で自分をどれだけ相手に伝えることができるのか、もっと自分を相手に伝えるためにはどうしたらいいのか考えさせられた時間であった。（神田外語大学・2年・女性）
- ◆見ず知らずの人と打ち解けるのに、必要なのは意見と気持ちと場所と時間、そして少しのスリルだということを実感した。正直、この講座を受ける前は仲良くなれるのか、打ち解けられるのかという不安しかなく、とりあえず、体を動かせる貴重な時間だから頑張ろうという気持ちで参加した。しかし、講座を終えてたくさんの友達、ではなく、たくさんの仲間ができた。また、会いたい、四日間では足りないと思えたのもこの体験と仲間あってこそその気持ちだと考えている。（京都外国語大学・1年・女性）
- ◆実技をすることがメインというよりも実技を通してほかの人とコミュニケーションを図りその人と距離を深めていくことがメインで人との距離の縮め方を考えたりする重要な機会だと思いました。（神戸市外国語大学・1年・女性）
- ◆アドベンチャーでは、グループになってみんなで協力しあってゲームの成功を目指した。私たちのグループには、積極的に意見を言う人が多かったので、互いに認め合うことを大切に。「それいいね！」「やってみよう！」といった掛け声をよく耳にした。そのため、ほとんどのゲームで成功できた。唯一失敗したシーソーは、何度も失敗したにもかかわらず、あと少しでできそうだったために、やり方を変えなかったことが問題だった。失敗したら、何か他の案はないか、考えるべきだったと思う。しかし、一つのことをみんなで頑張ることで、チームの中は一段と深くなった。初めて会った人たちだったのに、深い話をしなくても、友達になることができた。スポーツは、どんな人とも仲良くなれる手段だと実感した。（長崎外国語大学・3年・女性）
- ◆一人も知ってる人がいない中で体験でした。ニックネームを覚えるゲームからはじまり、最後はみんなで手を取り合って何かに挑戦しました。3つの競技を全てクリアする事ができました。結果が全てではなく、それよりも徐々に縮まっていく心の距離を感じる事ができました。ゲームをしていく中で名前を呼びあったり、それぞれが意見を言い合ったり、励まし合ったり、反省点を言い合ったり、さまざまな工夫をすることで最後には1つのチームとして団結する事ができました。自然とみんなに笑顔が増えていくのがわかりました。何かに向かってみんなで頑張る事、失敗しても反省してまた挑む。それを気遣いつつ、自分の意見も混ぜていくと良いということを知りました。（名古屋外国語大学・3年・女性）

【2/11(木)】スポーツと言語教育におけるグローバル人材育成

講師名	朴 ジョンヨン先生	市居 愛先生
経歴	2011年 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程修了(体育学) 2012年～神田外語大学体育・スポーツセンター専任講師 2015年 筑波大学大学院人間総合科学研究科スポーツ健康システム・マネジメント専攻 非常勤講師	2000年 シドニーオリンピック通訳ボランティア経験者 2004年 アテネオリンピック通訳ボランティア経験者 早稲田大学スポーツビジネス研究所・招聘研究員
講座内容	国内・外におけるスポーツ国際大会は増加の傾向にあります。大会円滑な運営には言語・コミュニケーションの分野が大きな課題であり、外国語が使えるボランティアの存在は必要不可欠です。国際大会における通訳ボランティア経験を通じて学生の言語運用能力や語学学習意欲の向上を図る取り組みを進めてきました。外国語を日常的に使用できる環境にない日本の学習者たちにとって、責任を伴う形で外国語を使う体験は、さらなる高度な言語能力獲得への大きな動機付け、学習意欲の向上につながっています。この講座では、その取り組みについて概説し、後半の部分では実際参加した学生を交え、活動内容をご紹介します。	



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆朴先生からは、スポーツ文化には「するスポーツ・見るスポーツ・関わるスポーツ・読む、着るスポーツ・支えるスポーツ」があることを教えていただきました。スポーツが苦手な私でも、観戦することでスポーツ文化に自然と関わっていたんだと嬉しくなりました。今後開催予定の世界的競技大会には支えるスポーツとしても関わっていけるように、異文化理解力や自分の国の文化の理解力、外国語力を向上させていこうと思いました。市居先生は、実際にボランティアの経験がある方で、生の声が聞けてとても為になりました。大会ボランティアをきっかけとしてプロの方に自分を売り込むボランティアスタッフの話聞いてそうやって自分の夢に近づくことも出来るんだと思いました。今後開催予定の世界的競技大会ボランティアに参加して市居先生やセミナーに参加したみんなと大会を支えられたらと思いました。(関西外国語大学・1年・女性)

◆朴先生のお話の中で、今後の私たちに求められているのも、グローバル人材の共通点についてのお話があった。私たちは、今後自分から動く主体性が必要という話を聞いて、遠慮してはいけないなとすぐに考えた。日本人は、他人を大切にするという、とても大切な心を持っている。しかし、それは時によくないこともあるのかなと思う。また、グローバル人材の共通点としても、やはり海外に出てみないとわからないことがたくさんあるはずなので、自分から海外に出て、今以上に日本のこと、海外の同世代の人々のモチベーションなどを学びたいと思った。市居先生は、実際に通訳ボランティアをした経験のある方だったので、とても得るものが大きかった。申し込み方法から、実際に通訳ボランティアするまでの、トレーニング期間のお話まで、様々なことが聞けて、とても興味深かった。(神田外語大学・1年・女性)

◆ボランティアというのは、仕事<ボランティア>遊び というように、仕事と遊びの間に位置している。つまり、ボランティアは自発的に動くものでそこには責任も伴ってくる。ボランティアをすることは悪いことではないと思うが、無責任なボランティアは行うべきではないと改めて思った。「やってあげる」という気持ちではなく、ボランティアを通して何か得たい、人のための何か貢献したいという気持ちがなければいけないと思った。今後生きていく上で大事なことは恐れることを恐れない、若いエネルギーでできることはたくさんあると思うから、できるうちにもっと色々なことに挑戦していきたい。(京都外国語大学・3年・女性)

◆英語学習に対するモチベーションがかなり上がりました。実際に海外でオリンピックのボランティアを経験された方のお話はすごくためになりましたし、自分が挑戦する際のヒントになることがたくさんありました。世界的競技大会の会場でのボランティアはハードルが高そうですが、それに向けての長期的な計画をして努力したいと思いました。(神戸市外国語大学・4年・女性)

◆日本が世界を変えるために私も今後開催予定の世界的競技大会にボランティアとして参加したいと思った。やりたいことは、怖がらずにチャレンジすべきだと知って背中を押されたように感じた。自分の強みを見つけた。(長崎外国語大学・1年・女性)

◆朴先生の20歳は24時間時計だとまだ朝6時だという言葉が心に残りました。就職活動で失敗したらどうしようと考えただけで頭がいっぱいになってしまっていた私は失敗してもいくらでも巻き返せると強い気持ちになれました。守りに入らずに挑戦する気持ちを忘れないでいようと思います。市居先生の世界的競技大会ボランティアの経験はとても興味深く、また具体的に知ることができたので今後開催予定の世界的競技大会を現実に思い描くことができました。(名古屋外国語大学・3年・女性)

講師名	矢頭 典枝先生
経歴	<p>東京外国語大学大学院博士後期課程修了。博士（学術）。</p> <p>単著に『カナダの公用語政策』（リーベル出版）、共著に『多様社会カナダの「国語」教育』（東信堂）、『はじめて出会うカナダ』（有斐閣）、『現代カナダを知るための57章』（明石書店）、『カナダを旅する37章』（〃）など。</p> <p>専門は社会言語学・カナダ研究。</p>
講座内容	<p>日本における一般の英語教育では、アメリカ英語が教えられていますが、今日、様々な国から外国人の教員が来日し、英語を教えています。彼らの出身国によって、英語の発音だけでなく、単語も異なることがあります。こうした状況を踏まえ、神田外語大学は東京外国語大学と共同開発で、「世界の英語の違い」を学ぶ無料ウェブ教材を開発しています。本講座では、この教材を使い、アメリカ英語だけでなく、TOEICのリスニングの問題でも使われるようになったイギリス英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語、カナダ英語を聴き、その違いを学びましょう。最新版のシンガポール英語も聴きましょう。</p>



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆私は大学で英語を学んでいますがこの講義の中で扱ったシングリッシュなどは初めて具体的に学びました。海外から来る観光客はアメリカ英語を全員が使っているわけではありません。そのため様々な国の英語も知っておくことが必要だと感じました。（関西外国語大学・1年・男性）

- ◆世界の英語の違いを比較しながら学べるサイトがあったことを今まで知らなかった上に、使ってみるとどんどん興味が湧いてきて、今では毎日閲覧しています。何も知らずにシンガポールの方と接するのと、シングリッシュの知識があって接するのは全然違うのではないかと思います。これからも勉強を続けていきたいです。（神田外語大学・2年・女性）

- ◆矢頭先生のお話は言語学で私自身好きな分野なのでとても興味深いものでした。英語圏だけでも全然違う発音であったり、単語自体が違ったりと先生自身が共同開発で作られた動画を見ながらしていただく講義で面白かったです。真面目な内容であるが、笑いもあり受けてとても楽しい講義でした。私の専攻語はイタリア語なのでそれはどうなのかという新たな疑問も浮かんできて、自分でも研究してみたいと思いました。（京都外国語大学・2年・女性）

- ◆私たちが長らく正解不正解のハッキリとした義務教育として習ってきた英語における多様性の講義は、これから実際に話す英語を使用していく私たち外大生にとって特に貴重なものであったと思います。現地に適応し時代と共に変化していった生きた英語を知ったことで、これまで10年近く自分の習ってきたものが如何に死んだ凝り固まったものであったのかということをよく理解できました。（神戸市外国語大学・2年・男性）

- ◆単に英語といっても、国によってイントネーションやアクセントが全く違うなと思った。様々な国の英語を聞いたが、全くといっていいほど分らなかった。しかし、とてもおもしろいなと興味をもった。深いなと思った。国が違えば英語を話していても英語には聞こえないのだなとおもったし、まだまだもっと違う英語を話すような国があるのではないかと考えた。（長崎外国語大学・1年・女性）

- ◆自分の中での勉強したいことが今まで曖昧でしたが、この講義を通じて、言語学にとっても興味を持ち、これから言語学を専門的に学びたいと強く思いました。同じ英語でも、国によってまったく発音が違ったり、その国独自の言葉があるところの方が面白く感じました。授業で紹介された「英語モジュール」を使い、勉強を継続させていきたいです。（名古屋外国語大学・1年・女性）

講師名	小坂 貴志先生
経歴	神田外語大学外国語学部教授 Former Assistant Professor at Graduate School of Translation and Interpretation, Monterey Institute of International Studies
講座内容	通訳・通訳の基礎を紹介します。通訳・通訳とは何かについて、ジャンル（例、文芸通訳、技術通訳）という観点で分類する通訳、モード（例、同時通訳、逐次通訳）で分類される通訳について、それぞれどのようなジャンル、モードがあるかを説明します。その上で、本プログラムの通訳ボランティアに求められる姿勢や技能について、講義者の経験も踏まえながら解説していきます。通訳に焦点を当てて、訓練法についても考察します。



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆決められた時間内に、日本語で情報を掴みそれを英語に置き換えて発信する。表現だったり単語1つで意味合いが変わってしまう場合もある。また通訳の場所、状況によっては取り返しがつかないことになるという重要性を学びました。（関西外国語大学・3年・女性）
- ◆通訳に関する種類や、訓練法、また後半では簡単な自己紹介を日本語で話したことを他の学生に英語で伝えるという通訳の体験をするなどとても実践的な講義でした。メモを取るときには後から付け足して書くこともできるように斜めに書いていくことや、通訳の人はその通訳する人の言葉であって一人称を自分にすることなど、通訳をする際のコツも教えていただき通訳に関する知識が深まりました。（神田外語大学・3年・女性）
- ◆この授業では英語で自己紹介を行いました。まずは3人1グループに分かれ、グループ内で1人ずつ自己紹介を行いました。その際、聞いている側はメモを取り、そのメモをもとにグループのメンバーを他のグループの人たちに紹介するというものでした。自分がとったメモから文章を作り、内容を正確に伝えるという作業は想像以上に難しく、自分の力不足を実感しました。今後もこの授業で学んだことを生かし、日ごろから思ったことや感じたことを英語で声に出したり、ノートに書きだしたりと、実践的なトレーニングを行っていきたいと思います。（京都外国語大学・3年・女性）
- ◆普段やっているような聞いたことを要約して話すのとはまた違って、すごく独特な技術があるなと感じました。話の重要な部分をすべて落とさずに聞くのはかなり難しいトレーニングが必要だと思いました。（神戸市外国語大学・4年・女性）
- ◆実際に通訳をした。3人グループを作り、日本語で自己紹介をする人、それを英語でメモする人、普通に聞く人にわかれた。約3分間で話し手が言ったことを英語でメモし、その後英語でその人の自己紹介を他のグループに紹介した。この時に注意すべき点は、あくまでも話し手として訳すことである。そのため“I”を用いる。最初は、自分のことではないので違和感を感じたが、通訳の仕事を実践することができた。話者が言った通りに訳すのは難しく、少し言い方を変えてしまったりしたが、通訳者の伝え方で、話者の印象が変わってしまう。話者が本当に言いたいこと、伝えたいことを汲み取って、そこを崩すことなく伝えることが必要だと感じた。（長崎外国語大学・3年・女性）
- ◆通訳になるための訓練を勉強しました。メモの取り方からパートナーの自己紹介を英語でメモし、グループ内で発表するという事もしました。メモはキーワード、数字を書き取り、なにより自分のために書くものと教わりました。ノートテイキングは目標言語で書くことの難しさを体験しました。そして、相手の事を紹介する際も自分がその人になりきって話さなければならないというところも思ったより難しかったです。（名古屋外国語大学・3年・女性）

【2/11(木)】医療・メディカルに関する知識

講師名	伊藤 博子先生(BASIC)	水野 里香先生(INTERMEDIATE)
経歴	アルバートスマグナス大学経営学科卒業 御茶ノ水整形外科昨日リハビリテーションクリニック理 学療法士 Tokyo Medical English and Japanese for Healthcare Professionals主催	アメリカの高校・大学・大学院卒業 米国企業、在米日本企業に勤務するかたわら、日英通訳・ 翻訳業に携わる 鍼灸マッサージ師国家資格・教員資格取得、アメリカ鍼灸 資格試験合格 現在鍼灸治療院開業、セラピスト英会話講師、医療関係翻 訳に携わる
講座内容	スポーツの場面に医療は欠かせないものです。スポーツ関係の通訳をするにあたり、知っておきたい基礎的な医療知識 や、選手に傷害が起きた時の対処法・治療法について理解を深めます。また選手と医療関係者の間に入り対応する場合 に使える日英医療専門用語・表現法を学びます。スポーツ通訳として実際に遭遇するであろう状況を想定し、学んだ単 語や表現法を使って演習も行います。	



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆BASIC：医療など自分には縁のないお話だと思っていたのですが、もし選手が怪我をしたり世界的競技大会に訪れる会場の人が病気や怪我をした時に、自分がある程度の医療英語を知っているだけでその人を救うことが出来ると考えると、とても大事なことなのだと思います。（関西外国語大学・2年・女性）
- ◆INTERMEDIATE：スポーツ大会の場面に関わるということはやはり医療に関する知識もないといけません。私たちは医者と同じことはできませんが、応急処置をしたり、単語の知識があることで救われる人がいるかもしれません。習ったことは初めて聞いた単語ばかりで難しかったのですが、ちゃんと医療についての知識も取り入れた通訳ボランティアになりたいと思いました。（神田外国語大学・3年・女性）
- ◆BASIC：医療通訳についてとても詳しく教わりました。まず、そのまま同じことを翻訳してはいけないということ、詳しく相手にわかりやすく伝えること、そして万が一緊急時の時に自分が現場に居合わせていたら、心臓マッサージや、手首をかの脈絡を確認すること、自分が医療について少しでも知っているを施すことで患者の命が助かることを知りました。また、患者とドクターが話している際の通訳で、患者と目を合わさずにつたえらることで、患者が依存しないようにすることを学びました。このような点に気をつけて居合わせときに的確な対処を出来るようにしたいです。（京都外国語大学・1年・女性）
- ◆INTERMEDIATE：医療に関する単語は聞きなじみのないものばかりでした。私は、海外に行ったときに友人が体調を崩して病院に行ったことがあるのですが、病状を伝えたり、医師の話を聞くのはかなり難しかったです。医療に関する英語が必要な状況は、緊急のときでもあると思うので、そういったときでも冷静に対応できるように、準備が必要だと感じました。（神戸市外国語大学・4年・女性）
- ◆BASIC：通訳というのは、医療分野でも力になるということを知れてよかった。医療現場での様々な知識を学ぶことができたと思っている。しかし、英語を理解するだけでなく患者の体調や考えに合わせてしなければならぬのだなど、医療的な知識も必要だなと感じた。（長崎外国語大学・1年・女性）
- ◆INTERMEDIATE：個人的にスポーツにとっても関心があるのでとても興味深い講義でした。幼い頃に海外で器械体操をしていた経験があったので聞いたことのある単語なども何度か出てきました。スポーツ通訳という考えたこともなかった仕事についても知る事ができて良かったです。興味を持つ事ができました。しかし、やるとなれば生半可な気持ちではできないということも実感しました。覚える事が多く、時には選手の命に関わる事があるということも今回の講義で知る事ができました。（名古屋外国語大学・3年・女性）

【2/11(木)】同時通訳演習から学ぶ技法

講師名	柴田 パネッサ先生(BASIC)	曾根 和子先生(INTERMEDIATE)
経歴	<p>神田外語大学 英米学科 非常勤講師 ウィスバリング同時通訳研究会 代表 武蔵一族合同会社 代表通訳者 フリーの通訳者、通訳案内士</p>	<p>オーストラリア・クィーンズランド大学大学院で英日通訳・翻訳の修士号を取得。帰国後、フリーランスの通訳者になり、衛星放送の放送通訳者や会議通訳者として稼働。現在、大学で、通訳法、翻訳法の講座を担当。民間の通訳養成スクールでも顧問を務める。</p>
講座内容	<p>この通訳のトレーニングは他の語学教授法と違い、学習の早い段階からリテンションやクイック・レスポンス練習を行い、語学訓練と同時に学習者の記憶力、メモ取り技術、集中力なども強化していくという点です。トレーニングのメソッドは色々ありますが、それら一つ一つの目的と方法と評価基準を明確にして、何を強化するためにどのように学習をするかを知ることが目標としています。</p>	<p>アテンド通訳とは、来日された方が、気持ちよく滞在できるように、その方のコミュニケーションを支援する通訳で、移動、宿泊、食事、パーティ、見学、打ち合わせ等、様々な場面で、通訳を必要とする方の手助けをするのが主要な業務です。今回のセッションでは、アテンド通訳で求められる基本的なスキルを実践的に訓練し、良く使われる表現を、英語から日本語へ、日本語から英語へと、素早く訳出する能力を付ける事をめざします。</p>



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆INTERMEDIATE：初めて通訳演習を体験してみて、普段の英会話とは全く別の能力が必要だということを実感した。ただ英語を話せるということだけでなく、瞬時に文章を記憶する能力を鍛えるには日々の練習が欠かせないと思った。（関西外国語大学・3年・女性）
- ◆BASIC：知識だけでなく同時通訳に必要な技術においても大変なことになることを教わりました。通訳、特に同時通訳は相手の言っていることを聞き取りながらそれを他言語に正確に変換してアウトプットしなければいけません。そんな英語が話せるようになってしまえば簡単だと思っていたのが大きく覆されて同時通訳の場面を想像しただけで圧倒され、さらにモチベーションが大きく上がりました。これまであまり通訳に興味がありませんでしたが、是非今後開催予定の世界的競技大会でも活躍できるようになるという目標がより大きくなりました。（神田外語大学・1年・男性）
- ◆INTERMEDIATE：通訳において、必要な能力の鍛え方を学んだ。反射神経を鍛え、インプットのためのshadowing、メッセージを記憶するためのreproduction、そしてアウトプットのためのtranslation。自分に足りない能力を知ることができ、講義後は実践している。（京都外国語大学・4年・女性）
- ◆BASIC：実際に通訳に必要な技能やそれを身に着けるための練習の方法を学べてより通訳へのモチベーションを上げることができました。（神戸市外国語大学・1年・男性）
- ◆INTERMEDIATE：通訳に必要な技法は3つある。1つ目はInputでなんとなくではなく、正確にメッセージを耳から入れることである。それをshadowingで聞こえてきた言葉を落とさず全部自分で行って見る。意識して聞いていることがわかることが大事である。反射神経でとらえることができるようになるために必要な訓練である。2つ目はMemory、音で入ってきたものを記憶する能力で逐次通訳の技術でもある。決してメモはとらない。この2つは起点言語側の訓練である。3つ目は目標言語側の訓練、Outputでいわゆる目標言語に訳して発話することである。しかし、直訳しただけでは何を言っているかわからないので、目標言語の能力も問われる。例えば、You can't say what you can't back up.を日本語に訳したとき、「証明できないことを言うことはできない。」では意味がわからない。つまり「いいかげんなことをいわないでよ。」ということである。実際に、shadowing, Memory, Outputを試してみたが、手も足もでない自分が情けなくなった。基本的な英語力に加え、通訳をするには、まだ相当の訓練が必要であると痛感した。（長崎外国語大学・4年・女性）
- ◆BASIC：この講義では主にYouTubeを使って通訳の練習をしました。YouTubeにも通訳の練習に役立つ動画がたくさんあることを知り、今後自分でもYouTubeを見て通訳の勉強や英語の勉強をしていきたいと思います。（名古屋外国語大学・2年・女性）

【2/11(木)】プロ通訳から学ぶ通訳スキル

講師名	椎名 純代先生(BASIC)	中曽根 俊先生(INTERMEDIATE)
経歴	クボタスピアーズ 通訳兼ファシリテーター/ Good Sport association 代表 スプリングフィールド大学にて修士号を取得。帰国後、一般企業を経て、J1川崎フロンターレ 育成・普及部の教育担当。2013年スポーツの教育的・文化的価値向上を目指すGood Sport associationを設立。	NHK衛星スポーツでのアメリカ3大スポーツ中継番組やCNNワールドスポーツでの翻訳・ボイスオーバー。 2004年～2009年には、千葉ロッテマリーンズ球団でポビー・バレンタイン監督専属通訳。
講座内容	ラグビーチームの通訳現場を通して、下記内容を中心にお伝えします。 ・語学力以外の経験が役に立っていること ・どのようなプロセス（キャリア）を経て通訳をするに至ったか ・スポーツ現場の通訳として気をつけていることなど	通訳とは、ただ単純に一つの言語を別の言語に置き換えるだけではありません。通訳に大切なことや良い成果を生む、ヒントをお話しします。 ・言語の向こうに必ず存在する、特有の文化・習慣の理解 ・通訳をするための正しい言葉の使い方 ・普段の生活の気付けによる大きな違い



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆BASIC：椎名先生の講義は、通訳スキルと同時に、先生の軌跡や人生観を聞けてとても刺激のあるものでした。最初はできなくてもとりあえずやってみるものの大切さを深く感じました。頭で深く考えすぎずとりあえず行動！の気持ちを日頃から常に持って行こうと自然と思わされる良い授業でした。（関西外国語大学・1年・女性）
- ◆INTERMEDIATE：この講義で一番印象に残っていることは、通訳が事前に行う準備がどれほど大切であるかということだ。以前世界サンボ選手権大会の通訳ボランティアに参加した際は、スピーチ原稿の日英・英日翻訳を行い、インターネットで競技について調べたり、大会関係者に話を伺ったりして業務にあたった。講義から、そのような準備・下調べはその時だけではなく、今後につなげるためにも必要であるということも学ぶことができた。通訳の準備として、話者が以前に話したスピーチや翻訳された記事等を探し、その中の単語や表現を単語帳として一つにまとめるという作業を姿積み重ねて行っている勢にその道を究めている人の前向きな姿勢が感じられた。（神田外国語大学・4年・女性）
- ◆BASIC：英語と一言で言っても、イギリス英語、アメリカ英語のようにアクセントや発音、単語の使い方が話される地域で違う。国際社会ではそのような様々な英語が飛び交うのでどんな英語にも対応できるように慣れることが必要。共通語として使用される英語が英語圏の国でも使われ方が異なる上に、第二言語として使用する人も多数なので、一番有効な練習方法は実際に国際的な場でボランティアなどとして参加して様々な英語に触れることであると考えた。（京都外国語大学・2年・女性）
- ◆INTERMEDIATE：様々な場での通訳経験をお持ちの方で、今も活躍されているということで貴重なお話を聞くことができました。普段スポーツの場での通訳を多くしていて、突然美術関係の通訳の依頼が来たときに、その作品の批評を調べて、使われている表現を前もって予習したりなどされていると聞いて感銘を受けました。至らない部分を把握し、常に最善の努力をなされているのだと感じました。（神戸市外国語大学・4年・女性）
- ◆BASIC：現役通訳者の方から話を聞き初めの頃は戸惑い言葉もでてこない、またスポーツの競技1つ1つに専門用語がありルールを覚えることも必要で大変であることがわかった。（長崎外国語大学・1年・男性）
- ◆INTERMEDIATE：どんなに通訳の経験があっても事前準備を怠らないというプロの意識を知りました。単語と単語の変換ではなく、その単語の背景、文化を見極めることが通訳の役割であるとわかりました。また、正しい日本語を使う事の大切さも身にしみて感じました。（名古屋外国語大学・3年・女性）

【2/12(金)】インバウンド・観光戦略の動向

講師名	村山 慶輔先生
経歴	株式会社やまごころ 代表取締役 インバウンド（訪日観光）ビジネスコンサルタント 兵庫県生まれ。米国ウィスコンシン大学マディソン校卒。在学中、異文化交流に強い関心を持ち、20カ国以上を旅行。 2007年インバウンド観光情報サイト「やまごころ.JP」を開設。
講座内容	今後ますます日本を訪れる外国人は増えていきます。日本には富士山をはじめとして世界に誇る観光資源がたくさんありますが、外国人観光客を呼び込む最高の観光資源は「人」です。世界中に日本のファンを増やしていくためには、高い志を持つ皆さんの協力が必要です。まずは外国人が日本をどう見ているのかを知り、今日からすぐ実践できる「おもてなし」を学びましょう。



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆外国人観光客の増加には普段の生活の中でも気づいていたが、数字で表すと数の多さを改めて実感した。外個人観光客の日本の不満に思う点の一つで無視されているような感じがするとあったが、それは自分にも当てはまるのではないかと思った。私のアルバイト先にも多くの中国人観光客が訪れるのだが彼らに対しては接客を控え込んでいるような感じがする。避けようと思っているわけではないが、言葉が分からないというのもあり少し怖気付いてしまっている自分があるのは確かだ。この授業を受けて、自分の外個人観光客に対する姿勢変えようと思った。（関西外国語大学・1年・女性）
- ◆外国人観光客が急増している日本にこそ、外国人目線で理解を進めることが必要不可欠だとおっしゃっていました。私の父が静岡県の田舎でインバウンドに関わる仕事をしています。そんな地元の状況を頭に浮かべながら聞くことができました。村山さんは地方こそ世界で勝負すべきだとおっしゃっていました。また地域の活性化が日本の未来に大きく影響するとも、自分の地元ももっと世界に広げたい、地元に貢献していきたいという気持ちがよりいっそう強くなりました。（神田外国語大学・1年・女性）
- ◆京都や大阪のように外国人観光客を取り入れている都市は、経済的発展もあるしメリットがあると思える。しかしデメリットもある。外国人観光客のマナーの悪さや、それが招く地元住民、常連客などの利用の減少である。自分も依然中国人観光客のいわゆる「爆買い」というものに遭遇したことがあるが、その光景は自身の購買意欲を低下させるものであった。そういった人は今の日本国内に少なくないと思う。外国人観光客が増える、地域が活性化するのはいいことだと思うが、しっかりとした受け入れ態勢を整えることも大事なのではないかと思う。その地域の伝統や歴史、人々の繋がりを壊さず、いかにして外国人観光客を迎えるか、そういった課題にどう対処していくかが今後の日本の課題なのではないかと思う。（京都外国語大学・2年・男性）
- ◆今盛り上がっているインバウンド市場の色々な可能性を知ることができました。インバウンドという観光事業を想像しがちですが、それ以外にもメーカーや物流、通信などたくさんの事業が関わっていることがわかりました。日本の主要都市だけでなく、地方の意外な場所が外国人に魅力的に見えたり、意外な形でビジネスが生まれるところが面白いと感じました。これから就職活動が始まるので、自分のキャリアを考えるうえでもたれなる講義でした。（神戸市外国語大学・4年・女性）
- ◆インバウンド、観光戦略についてはなかなか触れる機会のなかったので、村山先生の話聞いてとても新鮮で、興味深いと思いました。この講義では、外国人目線にたつて、外国人観光客を呼び込む最高の観光資源は「ありのままの自然」と「日本人」（日本人の気質、日本人の作品、日本人の生活）であることが理解できました。認識の違いを埋めていくことや地元の素材を外国人の目線で評価することの大切さがわかりました。（長崎外国語大学・4年・女性）
- ◆インバウンド事業は以前から興味があったので村山先生のお話が聞けてよかったです。特に印象に残ったお話は外国人観光客の不満No.1は無視されていると感じるということです。私は外国人に慣れているのでそのようなことはないが、一般の日本人の対応は言われてみればそういう風にとらえられてしまうかもしれない。いろいろな目線で物事は見ないと気づけないことだらけだとわかりました。（名古屋外国語大学・3年・女性）

【2/12(金)】ホスピタリティ検定3級講習

講師名	野中 美木子先生(BASIC)	野口 幸一先生(INTERMEDIATE)
経歴	ホスピタリティ機構認定講師 元NHK甲府放送局アナウンサー 大学にてマナー講座、企業・自治体等でホスピタリティ講座を担当	ロンドン大学クイーンメアリー・カレッジ予備コース学生 コンサルタント 明治大学リバティ・アカデミー講師 東京観光専門学校鉄道サービス学科教育課程編成委員 大学、自治体、社会福祉法人等でホスピタリティの講座を担当
講座内容	通訳ボランティアにはホスピタリティが必要です。ホスピタリティとは、相手を大切に思い、相手の立場に配慮することです。1人ひとりの個性や文化の違いを受けとめて敬う心が欠かせません。ホスピタリティ検定試験は、このような考えを具体的な言葉や行動に移すための工夫と確認事項で構成される試験です。講座では、受験対策はもちろん、ボランティア活動の現場でホスピタリティが実践できるように、ペアワークなども行います。	



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆一例として挙げられた、横断歩道を渡る障がい者へどう対応するかの答えが非常に興味深かった。手を差し伸べることだけがホスピタリティだけでなく、渡り終えるのを見届けることも一つのホスピタリティであることが分かった。必ずしも相手に伝わるとは限らないが、心で思っているだけでは伝わらず言動に表してやっと相手に気持ちが届くことが分かった。(関西外国語大学・3年・男性)
- ◆実践型の先生の授業はとても楽しかったです。自分が良いと思ったことだけをやるのではなく、しっかり相手の立場や心情をくみ取り、行動することでホスピタリティのある人間になれると実感しました。次回3月の検定はもう締め切りが過ぎてしまっていて残念ですが、10月の検定はぜひ受けてみようと思います。就職活動においても非常に有意義な講座でした。(神田外国語大学・3年・女性)
- ◆先生の講義を受け、相手のことを思いやり会話をする大切さを学んだ。実際の動きを使って体験するという講義がとても楽しかった。そもそもの挨拶の意味や笑顔、態度を学び、実際の生活に生かしたいと思った。無理に尊敬語、謙譲語でなくても「です」「ます」を使ったら大丈夫ということを知り、頑張りなくても丁寧な態度、言葉遣いを心掛けていれば大丈夫なんだと感じた。実際に相手の言葉の繰り返しや相槌をして、自分が聞いているということが伝わるように、話を聞くことが大切だと感じた。挨拶は会話がしやすいようにするために、テンション、トーンを相手と合わせる大切だと感じた。(京都外国語大学・2年・女性)
- ◆ホスピタリティということで、相手の立場を配慮した態度、言動を考え直す時間になりました。印象に残ったのは、自分のことも理解して受け入れるということです。そのうえで相手を理解し、違いを理解し、寛容さをもつことが大切だと感じました。挨拶や返事の仕方、話の聞き方など、普段の生活からできることがたくさんあったので、意識していきたいですし、ボランティアをする際に、英語でも自然にできるようになりたいと思います。(神戸市外国語大学・4年・女性)
- ◆留学生の私にとって、日本という国はホスピタリティを大切にしている国です。ホスピタリティとは相手を大切に思い、相手の立場に配慮することであると学びました。いろいろな活動を通して、あいさつの四つのポイントも実感できました。特に「あなたにあえて嬉しいという気持ちの伝達」というポイントはこれから活用しようと思っています。(長崎外国語大学・4年・女性)
- ◆表情・声のトーンひとつでその人の印象が大きく変わってしまうなと感じました。目配り・気配り・心配りの3つのアクションを活かすためには、相手との違いを受け止め、共感し共創することが大切だと学びました。そしてホスピタリティを発揮するためには「自分の在り方」も大切であるということも同時に学びました。挨拶・笑顔・返事・ちょっとした気配り・さりげない心遣いがしっかりとできるホスピタリティ溢れる通訳ボランティアを目指したいです。(名古屋外国語大学・1年・女性)

【2/12(金)】アスリートから学ぶ人間力

講師名	村田 亘先生
経歴	1968年福岡県生まれ。 元ラグビー日本代表。 現在、専修大学ラグビー部監督。 現役時代は、専修大～東芝府中～アピロン・パイヨンヌ（仏）～ヤマハ発動機ジュビロで、スクラムハーフとして活躍。元7人制ラグビー日本代表監督。
講座内容	「道を切り拓く」～個の強みがチームとしての成果に～ 学生時代からラグビー日本代表、監督に申し上がるまでの道のりを通して、アスリートの人間力とグローバル人材に必要な人間力を学びます。



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆村田先生の監督としてのチームへ教える時の試みがとても素敵でした。褒める時、怒る時、楽しむ時、素晴らしい考え方をもち人だからこそチームをまとめられるのだと思いました。ラグビーに対する知識も深まり、見せていただいた映像ではもっと見たいと思う程でした。これを機にラグビーを知ってみようと思いました。（関西外国語大学・3年・女性）
- ◆私も長年スポーツやってきたので、元プロ選手の村田さんのフィジカル的な悩みには親近感を覚えた。講義の中で彼が成功してきた裏に、愛されキャラであるコミュニケーション力や物怖じしないメンタルとそれを裏付ける自信が垣間見えました。私の所属するサッカー部は外語大学故に留学などがあり、良いチーム作りが難しい状況にあります。そこで村田さんの言っていた対話や笑顔、整理整頓と規律、そして感謝といった原点をもう一度見直してチーム改革に取り組もうと思いました。（神田外語大学・1年・男性）
- ◆人間力を発揮するためには、自分の強みを活かすことや、挫折を自分の成長につなげることなどを教えて下さった。常に挑戦し続け、それでいて謙虚な気持ちを忘れず、周りに感謝すること、アスリートだけでなく、私たちにも同じことが言えると思う。夢に向けて努力することももちろん大事であるが、人間力を失わないようにしたい。（京都外国語大学・3年・女性）
- ◆元プロのアスリートとして村田先生のスポーツに対する取り組み、そしてそこから得た経験といったものは、中学、高校とスポーツを続けてきた私には一方で共感出来たのと同時に大きな感銘を受けました。特に先生の仰った挫折は自分の成長、負けるが勝ちという言葉はとても印象に残っています。これからの英語学習、そしてその先の社会に出てからもこの言葉を胸に頑張っていきたいです。今回のセミナーの最後に村田先生のお話を聞けて本当に良かったと思います。（神戸市外国語大学・2年・男性）
- ◆アスリートである村田先生はこれまでのラグビー選手生涯には「自分の強みを活かせ、負けるが勝ち」というスローガンで支えられました。先生のフランス生活は確かに挫折がありましたが、それはまさに先生の成長にメリットになりました。すべての経験を己を知る機会として、どんどん強くなってきました。（長崎が外国語大学・3年・女性）
- ◆ラグビー選手の村田さんがあげていたポイントのうち私は「負けるが勝ち」、そして「挫折は自分の成長に」という言葉が気に入りました。負けて反省するからこそ人は成長します。ワールドカップでは、意識付けや動機付けのためにチームと個人で目標設定します。そして、チームを変革する3つの要素として、「規律」「笑顔」「感謝」があります。スポーツをする上で大切になってくる事は多くあります。この講義ではラグビーの話でしたが、村田さんが言っていた言葉はスポーツだけでなく、どんな時でも心がけておくべき言葉だと思いました。（名古屋外国語大学・3年・女性）

5. セミナーの様子（写真）



▲講義の様子（おもてなし講座）



▲野外でのアドベンチャー実技



▲懇親会



▲最終日の様子（神田外語大学副学長 柳沼先生）



▲参加者集合写真